国語授業から協働して広げる中学書写の提案
―「百人一首カレンダーを作ろう」の実践―

谷口　邦彦

百人一首を素材とした教材の開発

書写の学習は系統的にそして反復的に行われる。おもに技能（スキル）を身につけるための学習である。身につけたスキルは国語の学習や日常生活に生かされていく。一方、ふだんの国語の学習を書写と関連づけ、書写スキルの不足部分に気づかせつつ、国語から書写へと広げていく形態の授業も注目されはじめている。

筆者はかつて広島大学附属中学校において三年生を対象に「百人一首カレンダーを作ろう」を実践した。6～7名のグループで担当月を決め、その季節にあった歌を選び、小筆で書いてカレンダーへ貼る。卒業記念としても喜ばれた。

百人一首は短歌の授業でも扱われ、中学生にとって馴染みのある素材である。書写に関しては、練習にちょうど良い文字数、配列配置を工夫しやすいなど、主体的に取り組める素材と言える。歌から季節をイメージしたり、気に入った歌を選び内容を調べたりできるなど書きながら読みを深めることも期待できる。

本欄では二〇一一年四月、呉青山中学校の二年生を対象として行った特別授業の様子を紹介する。呉青山中学校は、学校行事として百人一首大会が行われ、国語科は授業内外でそれに向けた学習や準備を行っていた。なお、この授業の様子はＤＶＤに収録された（注）。

第一時　担当月にふさわしい歌を選ぶ

①「百人一首カレンダー」の作り方を把握する。

6枚綴り（例：4-5月頁、6-7月頁、8-9月頁、10-11月頁、12-1月頁、2-3月頁）、6～7人のグループで1年分を制作すること。

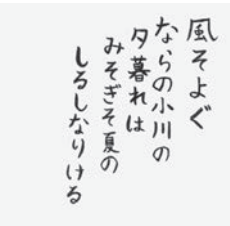
②担当の頁にふさわしい歌を選ぶ。

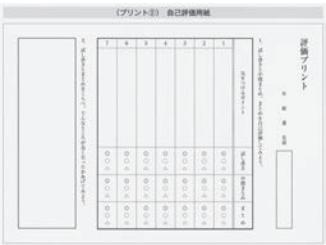
歌から季節をイメージすることができるようになる。

第二時　試し書きをする

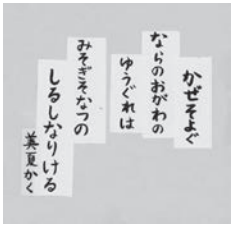
①用紙へ試書し、評価する（「自己評価用紙」）とともに、教科書の参考作品例や「評価活動を促すための作例」を示し、改善案を作る。

・周囲の余白を取る
・行の中心をそろえる
・行頭、行尾をそろえない
・行間に変化をつける
・漢字を交ぜる→字大の変化がつく



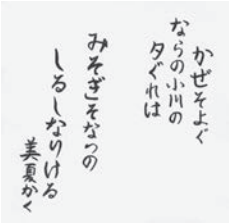


②配列・配置を考える。
短冊に書く。5つのポイントを踏まえ短冊を切り、用紙へ配置を工夫して貼る。全体で今一度目標を確認し、全体の配置を仮決定する。



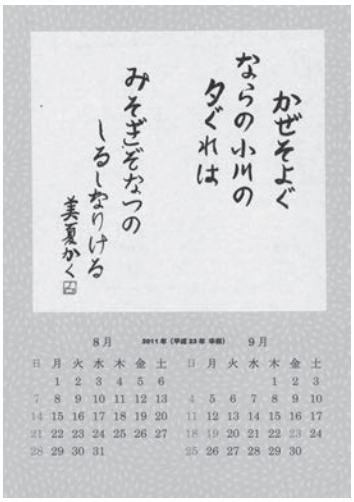
第三時　行書に調和する仮名の練習

①行書の特徴と共通な書き方に気づく。
・終筆が変わる
・線がつながる
・線が省略される
②用紙に書く。
③行書に調和する仮名の練習をする。
（空書。苦手な平仮名の取立て学習をする。）



第四時　まとめ書き

①用紙に書く。
②全体の配置を決定し、まとめ書きをする。書き浸る。最低限の個人指導を行う。グループの人数分を書く。
③カレンダーへ貼り、完成させる。
（消しゴム印で良いので、印を押すと見栄えが良くなる）



第五時　相互評価をする

①試書からまとめ書きまでを並べて自己評価した後、グループ内で作品を見ながら相互評価する。
②班長が、グループ内の評価の様子を全体に報告する。

求められる三つの書写力

本実践は、芸術性を加味した表現能力の面を意識したものになっている。ただし、この「表現するための書写力」以外にも、目的や相手、書式などにあわせて意思を的確に「伝達するための書写力」や、メモ・ノート（記録）をとる速度やアイディアの湧出にあわせて「記録するための書写力」等をいかにつけていくかが、今、書写に求められている。

中学校の書写（特に二、三学年）においては、スキルの学習に固執することなく、ふだんの国語の授業から国語の先生方による新しい書写授業を提案していただきたい。ここでは五時間の単元学習の形態をとったが、学習指導計画作成にあたっても柔軟でありたい。

注
DVD「百人一首カレンダーを作ろう」（株）坪川毛筆刷毛製作所（広島県呉市）制作

参考文献
久米公監修　千々岩弘一、鈴木慶子、松本仁志編著『書写スキルで国語力をアップする！　新授業モデル　中学校編』明治図書　二〇一一

たにぐち　くにひこ　安田女子大学文学部書道学科准教授。専門は書写書道教育、漢字書法。中・高教員経験を生かして書写書道の授業に関する実践的な研究を続ける。